

◆「歴史を体感するためのレッスン」ということ

数回にわたって、「懐かしさ」を演出する近年の映画や、「懐かしさ」を引き金にした「子ども連れ大人向け映画」について書いてきた。それらの映画においては、ある感情の揺さぶりとともに過去が想起させられ、世代の違う人々が同じ内容を共有することによって過去と現在の関係が考えさせられる。映画というのは基本的に娯楽であり、歴史研究で認められるような精確な過去の事実を表現したものではないけれども、歴史学者ではない普通の人々が過去を想い、現在を考える重要な契機である。このことは、論ずればきりが無い。歴史を体感するために重要なメディアである映画については、また後にふれることになるだろう。

ここで改めて、この連載のねらいを述べておくことにしたい。

それは副題にもある「歴史を体感するためのレッスン」ということにつける。けれどもさらに、それが何をねらったことなのか、ということである。

なによりも、「体感する」というところを強調しておきたい。つまり「頭だけで判断しない」ということだ。

もちろんこれはちょっと言い過ぎで、頭もまた体の一部であるし、最終的に判断するのはやはり頭なのだろう。それはいい。ただ、それでもなお「体感」という言葉にこだわりたいのは、人の「考えること」を制約しているものの存在を常に意識していきたいということからである。私たちの「考えること」は、自分たちで思っているほど自由ではないし、いつでもどこでも同じような判断を下す機械のようなものでもない。常に「何か」に制約されている。それは例えば「時代」と呼ばれたり「環境」と呼ばれたりするものだ。少し逆説的な言い方になるけれども、そう自覚するちよūdその分だけ、私たちは自由に考えることができるのではないか。

だからここで「体感」という言葉は、「体を使う＝頭を使わない」ために使っているのではなく、「考えること」そのものをいっそう豊かにするために使っている。私たちそれぞれの存在の有限性を超えた時間の厚みとしての歴史を考えること、またそうした歴史のなかで生きていることを深く考えるために持ち出されている。そのためには、相手を詰めるまで「王手」を続けることを強られる詰め将棋のような考え方ではなく、（これまた比喩的で申し訳ないけれども）「体」全体を使った過去に対する「気づき」、すなわち実感と納得が結びつき、そのことで自分の何かが変わる、というような瞬間が求められるのではないか。

そうしたことをしなければならないと考えるのは、やはり、私たちの現代社会における歴史の「問題」による。ただ「問題」といっても過去それ自体は変えようもなく、それはむしろ過去を歴史としてどう知り、それを現在との関係でどう評価するかという問題、すなわち「歴史認識問題」である。

この歴史認識問題は、現代日本社会における難しい論点の一つである。近隣の国の人々

が怒っていて、その怒りの理由が分からずに当惑したり憤慨したりしている人々がいる。一方で、この問題に関し万人が従うべき「正解」もあるとされ、そうした当惑や憤慨はそれ自体不適切だとされることもあるようだ。歴史認識をめぐる内戦（記憶の抗争）が起こっているようにすら見える。

さらにまた、どのような歴史認識を持つかということだけではなく、どのように歴史認識がなされるべきかということもある。万人が納得する「歴史」は存在しないという立場（それゆえ歴史認識とは政治的な抗争・闘争の場でしかないとする立場）と、それでも（だからこそ）精密な手続きによって過去の事実を確定してゆかなければならないとする立場があり、当然のことながら、相容れない。歴史問題に対する問題解決について最終的な主張が同じであったとしても、歴史認識の「方法」が異なるのだ。

こうしたことも後に書きたいけれども、この連載は、そこに直接介入することはしないつもりである。「正解」の提示は他の人に任せたい。この連載が試みたいのはもっと基礎的なことである。つまり、この問題が重要だと考えるからこそ、まず我々はそのためにどのような素養を持つべきか、ということである。

そう考えたのでこの連載は「レッスン」ということになる。いってみればそれは「体を育てよう」「足腰を鍛えよう」ということである。だが「体」のどこを何のために「鍛える」のか、「足腰」とは何を差すのか。

少なくとも現時点でいえるのは、歴史は人々の膨大な営みの集積なのだから、現在に生きる私たちが「頭だけで即座に判断しないこと」である。それは過去に対する尊重の念、畏敬のようなものであり、現在の視点から頭だけで考えて一刀両断するということをしないという態度だ。過去を否定したとたん、現在の自分がぱっと消えてしまうSFのことをよく考える。

一方で、歴史とは、現在の我々が認識しなければ存在しないものでもあろう。私たちの社会は、基本的に「忘れる」。忘れることで秩序が成り立っている部分すらあるといえる。歴史とは、そうした社会において忘れることに対する抵抗でもある。そのままでは忘れられてしまう過去の人々の営みを現在の我々が「知る」ことである。「現在の視点からの一刀両断」はいかにも雑だが、一方で、「現在の視点」なしには歴史が存在しない。歴史とは、現代的な問題意識による不断の修正の積み重ねでもあるからだ。

どこかに不動の正解があるわけではない。例えば裁判の手続きと歴史学の営みは、「過去に起こったことを証拠に基づいて検討し再現する」という点で似ている。裁判という場であれば、いくたびもの審理を経て判決が下され、「決着」ということになるけれども（ということにせざるをえない）、歴史はそうはいかない。歴史の全体像の把握や、どうしても明らかでない部分の推定、できごとに対する価値判断において、理解する人々のいわば「想像力」が必要となるからだ。これが、歴史学が大学のなかでいえば文学部にあることの意味でもある。もちろんここで「想像力」とは自分勝手な妄想のことではない。

そうした不安定な「歴史」とつきあってゆくための「基礎体力」をつけるためにはどう

したらよいのか、そういうことを考えてゆきたいのである。ここで「私たち」とは、プロの歴史学者のことではない。アカデミックな手続きに沿って歴史を考えてゆくのではなく、つとめて社会的な事象として歴史を考えてゆくこと。この連載では、様々な形で「歴史を体感するためのレッスン」を続けてゆくことになるだろう。

◆「歴史」を「社会学」で扱う

そういったわけで、この連載では、歴史について「社会学」という学問から考えてみたい。

こう書くと、読者のなかには、ちょっとびっくりする人もいるかもしれない。あるいは、「また社会学か。」とその凶々しさを思う人もいるだろう。学問の世界の割り振りでいえば、歴史はふつう歴史学という分野が取り組むことになっているし、学校教育のなかで子供たちに歴史を効率よく教授するための方法論ということであれば（社会科に関する）教育学から考えるのが普通だろうからだ。

歴史学は、過去のできごとを伝える史料と日々向かい合い、過去の事実を確定させて集積して歴史を記述しようとしている。教育学は、教育科目としての歴史について、その知識としての特徴も鑑みながら教授するための技術を磨くための諸方法を検討している。それらはともに常日頃から歴史というものの本質を考え続けていなければできないはずだし、当然のことながらそういった意味で歴史の「プロ」である。

でも、ここでは社会学という学問で歴史を考えてみたいのである。それがこの連載の「個性」になるはずだ。

そうすることの取り分は何か？ 歴史について考えることを歴史研究のプロである歴史学に任せずに、あるいは歴史を教育する方法論のプロである教育学でもなく、なぜ「社会学」がしゃしゃり出てくるのか？ いったい社会学が歴史とどう関わることができるというのだろうか？

そもそも社会学が歴史を扱うという場合、「社会変動論」という議論がその代表となってきた。それは、社会の構造変化（社会変動）を様々な社会的な要因によって説明する、というものである。とりわけ、社会の変化を、人々の心性、社会意識などの変容によって説明する議論は、「社会意識論」といって社会変動論のなかの有力な方法のひとつである。

社会学はなかでも特に「近代化」という大きな社会変動を説明しようとしてきた。そもそも社会学という学問自体が、近代化に対する同時代の知識人の観察の試みとして誕生しているので、その問題意識を継承したその後の社会学は、継承すればするほど、次第に「歴史としての近代化」を追う試みになってゆく。そして、社会学はその記述や説明のために生み出された諸概念を歴史学と共有しており、非常に両者の関係は近い。

また、ひとつの国や地域のなかでの変動だけでなく、それを相互に比較することで理解や説明はさらに確実なものになる。比較の試みは、近代化を促進する要因を変数としてあ

ぶり出す。近代化論の試みは、様々な国や地域における近代化を比較する「比較社会学」とでもいうかたちで展開していった。

社会学は「歴史」そして「比較」という視点を重視してきたのである。さらに、社会学の各領域（それぞれ「〇〇社会学」というかたちで「連字符社会学」と呼ばれる）においても、時間的な変化を考慮に入れた歴史的な考察はそれぞれ不可欠であり、歴史は社会学という学問において不可欠な視点である。つまり歴史社会学は普通、他の連字符社会学と違って固有の対象領域を持たない。むしろ社会学全体に対して本質的に重要な「方法」なのである。

ただこの連載では、社会学という学問を「レッスン」の方法とすることで、それらとは少し違った立場から歴史を扱ってみたいと考えている。それは、他の連字符社会学がそれぞれ固有の対象領域を持つと同様に、「歴史」じたいを考察の対象とする社会学である。都市を都市社会学、家族を家族社会学、環境を環境社会学がテーマとするのと同じように、歴史を社会学のテーマとしたい。

そうすると、社会学の分類でいえば、それは一種の知識社会学ということになるだろう。ある知識が生み出され、ある種の確からしさとともに、社会のなかで広まったり薄れていたりするさまを記述し分析する社会学の一領域である。

では過去に関する知識において「体感」がどのように必要とされるのか。それがこの連載でも問われてくる。